

▼研究ノート

青少年期のヴィリー・ブランド

——ヴァイマル末期の急進主義ラディカリスムスのうねりのなかで——

岡内一樹

1 はじめに——フラームがフロントになるまでの物語ゲシヒテ——

本稿は、のちに社会民主党（以下、SPD）の党首として西ドイツ首相を務めることになるヴィリー・ブランド（Willy Brandt 1913-1992）の、青少年期の経歴を考察するものである。ブランドはその本名をヘルベルト・フラームといい（Herbert Ernst Karl Frahm 以下では主にこの名で呼称する）、一九一三年二月一八日にリューベックの労働者街で非嫡出子として生まれた。社会民主主義者であった祖父に養育された彼は、一九三三年春に「ヴィリー・ブランド」を名乗ってドイツを出国するまで、リューベックで若き社会主義者として政治活動に身を投じていた。本稿で焦点となるのは一九二八年末から出国までのフラームの活動である。

本稿で詳細な検討はできないが、この時期のフラームを考察する際に無視できないのは、SPD党员で反ナチス抵抗運動家として知られるユーリウス・レーバー（Julius Leber 1891-1945）である。エルザスの小村に生まれ、第一次大戦時は志願兵として前線に赴いた彼は、一九二一年

にSPDの地方機関紙『リューベッカー・フォルクスボーター』の編集長としてリューベックに根をおろした。この地の社会民主主義勢力を牽引したレーバーと、やがて同紙に盛んに寄稿していくことになったフラーム——両者は「息子と父親のような、関係と緊張にあつたように思われる」とのちのブランドは回想している¹⁾。

ブランドの生涯については当然ながら数多くの先行研究がある。近年だけでも現代史研究者のグレゴール・シエルゲンや、ジャーナリスト兼歴史家のペーター・メルゼブルガーが、この政治家の全生涯をたどる著作を上梓している²⁾。またジャーナリストのマルティン・ヴァインは、出生からの三五年間に焦点を絞った綿密な検討を行っている³⁾。著名な政治家の生い立ちを主な関心とするこれら伝記的研究が依拠するのは、当時のフラームの寄稿記事や、のちの本人による出版物あるいは証言などである。

本稿も、寄稿記事の再検討を重視しのちの言説については補足的なものとして扱うとは言え、主に依拠する史料という点では大差はない。しかしながら執筆者の主要関心は、フラームの思想・行動の内に当時の

政治状況、社会主義陣営が抱えていた問題を読みとることにある。よって、機関誌などに現れる他の社会主義者の言説も適宜参照し、フラームの歩みと関連付けながら考察を進める。さしあたって想起される政治状況は、ヴァイマル末期における若い世代の政治的急進化である^③。それは共産党（以下、KPD）とナチ党という、左右両極の反共和国の政党が躍進していく過程と並行するものである。一方、共和国を担うSPDは若者を取りこむ魅力に欠けていたうえに、少数ではあるが党内左派の一部を社会主義労働者党（以下、SAP）の分離というかたちで失うことにもなるのである^⑤。

2 社会主義の青少年としての高揚

実の父がいなかったヘルベルト・フラームは、母親マルタ・フラームと母方の祖父ルートヴィヒ・フラームに育てられた。第一次大戦時従軍により不在だった祖父は、リユーベックではトラック運転手として働いており、SPD党员として市議会議員選挙時のリストに（選出の望みはない下位にはあるが）名を連ねたこともあった。フラームは祖父を「父さん^⑥」と呼んでいた。のちのブランドによれば、祖父と母は幼き彼が「走ることができるようになるやいなや、労働者スポーツ団体の子どもむけグループ、それから労働者マンドリンクラブに入れた^⑦」という。

フラームにとって、祖父と同等かそれ以上に意識せざるをえなかった年長の社会主義者が、ユーリウス・レーバーである。『リユーベッカー・フォルクスボデー』に寄せられたフラームの最初の記事と目されるのは、一九二七年二月、一三歳の彼が休暇の時の遠足について語った記事である^⑧。政治的な記事がある程度継続して掲載されるようになるのは、

その翌年一二月からである。同月一二日の記事でフラームは、自身が所属するSPDの年少者組織「赤鷹たち」における余暇活動などを紹介し、自分たちが「赤い旗を手にとり、社会主義の共和国への道を前進する」のだと主張している。のちの本人は正確な年月を想起していない^⑨が、しばしば編集部を訪れレーバーと顔をあわすようになったのは早くてもこれ以降であろう。寄稿によってフラームは原稿料を得ており、またレーバーはジャーナリストを志すフラーム（一九二八年から三二年までリユーベックの改革実科ギムナジウムに通った）にアビトゥーア後の奨学金も約束していた。

もともと、レーバーはすでにリユーベックの労働者勢力の中心人物となっており、これ以前にフラームが彼を間接的に知っていたとしても不思議ではない。軍から身を退きこの地にやってきたレーバー（ほどなく市議会議員に選出され、一九二四年からは国会議員も務めた）は、ヴァイマル民主主義の理念を守る闘士として舌戦と筆戦に熱を注いだ。政治集会においては反共和国右派を攻撃し、「我々にとって神聖な共和国」を「全身全霊をかけて防衛」すべきと呼びかけた^⑩。一九二三年八月に失業者のデモ隊と警察が衝突し負傷者が出るという騒動があったときは、警官の発砲などに関して事態に十分対応しなかったリユーベック市政府——SPD優勢の市議会と比較して、市政府はハンザ商人の伝統をくむ貿易商や市民層の利害を代表していた——を批判し、「反動的な市政府の首の骨が折れるまで」労働者がともに闘うことに期待をよせた^⑪。

一九二九年にフラームはSPDの青少年組織である社会主義労働者青少年団（以下、SAJ）に所属することになり、演説者としても才能を見せる。活動の熱は、第一には他組織との競合に注がれる。すなわち、「至るところで、工場で、家で、学校で、知人仲間内で、我々は我々の

青少年運動を宣伝しなければならぬ」と呼びかけ、ヒトラー・ユーゲントを「愚かなフリーズに酔わされている、扇動された青少年」と批判する。もう一方で、若き活力は社会主義思想そのものの深化に注がれ、「国際プロレタリアートとともに、解放のために奮闘する労働者階級とともに」社会主義を推進することを強調する。のちのプラントは、自身も目撃していた二三年八月の騒動を、経済停滞の陰鬱さと相まってヴァイマル共和国の政治的正当性にも疑問を持つに至った出来事として回想している。当時の心情に直接つなげて解釈することはできないが、いずれにせよプラントは、現実の共和国を社会主義あるいは民主主義の完成形として賛美することはなかった。

青少年が共和国を必ずしも理想視しないという状況は、プラントに限ったことではなかった。若い党員らの意見表明の場となっていた『青年社会主義報』には、年長者との確執を扱う記事が散見されるが、二年一二月の「三つの世代」と題する記事は以下のように分析する。すなわち、「第一の世代」は帝政期から政治的経験を積んでいるため、大戦後達成された共和国を理想的な民主主義体制と評価できる。「第二の世代」は若くして従軍し「殺戮の福音」を授かったため、民主主義になじまず「右と左からの政治的急進主義の支持者」となる。そして「第三の世代」つまり当時の青少年たちは、戦争を直接体験せずに育つたため、共和国を達成された成果と認識することはない。社会主義の青少年ということでは、「新しいドイツ国もまた生産手段が私有財産であることの上に成り立っている」ことに変わりはなく、彼らにとって理想はあくまで共和国という現実を超えた「社会主義労働者インターナショナル」である。このような理想はSPDの党綱領と矛盾はしないとしても、現実政治で舵取りを迫られる指導部および主流派の路線——国際

的・暴力的革命の必要性をしばしば訴えるKPDとは距離をとり、ヴァイマル民主主義の一翼を担おうという路線——と齟齬をきたしうるものであった。同誌の別の記事によれば、「若い労働者の精神的に活発な者たちが非常に広範囲にわたって党内左派に共感」していた。

青少年たちはこのような態度に加え、自分たちの青少年運動の自立性を強調する。プラントは『フォルクスボデー』で、SAJの活動の「自治」を説き、党の年長者による指導を否定している。「我々のプロレタリア青少年組織は青少年自身の仲間内から生じてきた。我々若き者たちは年長者たちとはやはりまた別の熱情をうちに秘めている。我々にとっては理念のほう^{イデオ}が党の幾多の日常的諸問題よりもさらにずっと重要な位置を占めるのだ！」と彼は主張する。さらに、必ずしもドイツのプロレタリア青少年に話を限定せず、諸革命を振り返りながら青少年が「いつもそこに居合わせ」、「常に革命の炎であった」とプラントが言うとき、そこには若さ、青少年であることそのものを賛美するかのような調子さえ響いてくる。これに対し、重要なポストへの登用が若い党員には閉ざされているという事態は、青少年たちにSPDの高齢化を印象づけた。

「若者と年長者との間に一般的に存在する、激しい対立、我々はそれを調停することを試みたい」という姿勢も表明していた²¹。プラントは、あくまで年長者の理解、政治的には社会主義推進のための協力を求めたのであるが、彼の社会主義への熱意は年長者の制御を越えたものであった。一九三〇年七月にプラントは、党の討論誌『自由な言葉』に——『フォルクスボデー』以外で青少年期の彼の文章が掲載された数少ない、そしておそらく最初の例であるが——ある反論記事を書いた。それは、先立って同誌に掲載されていた、カール・リープクネヒトとヒトラー

ーとを同等扱いする記事に対するものであった。「エーベルトとノスケの行いへのいかなる批判も除名の脅しで応じられるだろう。だがそのことで、我々のためにカール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクが真の階級闘争者として死んだということには何の変わりもない」——共和国を創立以来支えてきた年長党員の古傷に触れながら、「我々はこの共和国の崇拜者になるべきではない」と彼は主張した。のちの回想によれば、この記事を書いたことに関してフレームはレーバーと話したが、レーバーはその内容を非難せず、ただ「あなたの記事を送る前に、それを少なくとも一晩は放置しておいてください」と文章推敲の助言を与えた²³。

3 急進主義の末の決別

フレームはレーバーの援助もあり一九三〇年夏に二六歳でSPDに入党し（通常は一八歳以上が入党の条件）、ほどなくSAJの地区指導も任されたが、このころ国政は大きなうねりを迎つつあった。世界恐慌に端を発する経済危機・失業問題が深化するなか、九月の国会選挙でナチ党が大躍進し、KPDも議席を増やした。国会運営の困難さが予想され、SPD指導部はファシズム独裁を阻止するために「より小さな悪」であるブリュニング「大統領内閣」に協力し、議会主義復活まで待機するという寛容政策を明確に打ち出していく。

これに対してフレームは、「我々は右側での急進化・活発化の過程にプロレタリア青少年の活発化を対置しなければならぬ」とし、ナチズムとの直接対決の姿勢を明確化する²⁴。寛容政策は、青少年たちには闘争心の欠如と映り、彼らの心は党からさらに離れていく。「党の青少年が

自由な青少年運動か、年長者による指導か青少年による指導か」という議論において、共に後者、つまり青少年自身による組織管理のほうがある意義だという発言が増す一方、「事実たいていは党同志たちのあいだではこの『急進的な青少年たち』の真の考えの道筋についてまだ完全な不明瞭さが優勢である」——『フォルクスポーター』の記事でそのように観察するフレームは、「共和国、それは十分²⁵ではない——社会主義が目標²⁶である！」という主張を正当と見なすことで、ここでも自身の非共和国の立場を隠さなかった²⁷。当時このスローガンの主張は社会民主主義の青少年たちにより盛んに叫ばれた。党内左派の論壇『階級闘争』に「社会主義が目標」の題で掲載されたある寸評によれば、かつての帝政を知りえない青少年が、眼前のヴァイマル共和国において失業問題によりその未来を左右されていることが、その背景であった。別様の社会体制を築くための闘争が必要であり、「ゆえに我々は闘争への理想主義をなお有している、より高次の諸目標が我々の念頭にあるからである²⁸」とされる。

「プロレタリアートの国際解放闘争のために！」と訴えるフレームらの立場は非共和国であり反共和国ではなかったが、レーバーの生涯を研究したドロテア・ベックがまさに言うように、レーバーにとって「共和国は決して通過段階ではなく、目標であった²⁹」。ゆえに彼は心中穏やかではなかったはずである。のち一九三三年の論考でレーバーは、「ブリュニングへのいつそう無条件な寛容以外に打開策はまもなく皆無となった³⁰」と振り返っているが、いづれにせよ彼は寛容政策に従ったため、リューベックSAJの青少年たちの不満を買わざるをえなかった。党内では右派に属するレーバーがかねてから共和国の軍事的な防衛という志向を有していたことも、彼にとつての仇となった。すなわちレ

「バーは擬似軍事団体「国旗団黒赤金」を支持していたのみならず、「国防軍は共和国のものであり——共和国は人民のものであり——人民はあくまで社会民主主義である！」という立場から軍を肯定していた。³⁰海軍提案の装甲巡洋艦の建造についても、党の原則論からは距離を置いてこれを容認する立場にあった。³¹ こういった態度は、青少年たちの反軍事的感情（組織としての軍隊や軍事的規律の忌避）とは相容れなかった。

失業問題は若い世代の未来に暗い影を落としており、フラームも（個人として失業に苦しんだわけではないが）それを深刻にとらえていた。三一年一月にフラームは『フォルクスボデー』紙上で、失業青少年らの互助生活的な余暇活動を紹介した。「精神への圧迫」と題して、幾人かの青少年の失業に至った経緯などを例示しつつ、「至るところで我々は物質的および精神的窮乏を目的あたりにする」のであり、「援助が必要である！」と訴えている。³² 一方、SPDの年長者のなかにも理解者はいた。党内左派のマックス・ザイデヴィッツは『階級闘争』誌上で「若き世代のための一言」と題し、「青少年の経済的状況、これが若い世代の反抗の原因である」として、失業にさいなまれる青少年たちへの理解を繰り返し呼びかけている。ナチズムと共産主義が青少年の支持をとりこんだのに対し、「反抗的・急進的になった」「社会民主主義運動における青少年たちは、『より小さな悪』の政策がこれらの状況を幾分か変える」ということはもはや信じていない」とザイデヴィッツは言う。ちなみにこの記事で彼は「国旗団だけがこのファシズムの危機と闘う特権を有しているのではなく、党の指導のもと全員が持てる力を出してこれと闘うべきだとしている。フラームも「青少年が党とともに、それでかつ党が青少年とともに闘うことを我々は望む！」と述べており、³⁴ 危機的状況下

であえてSPD陣営内の足並みを乱すような意図はなかった。

ところで社会民主主義者が左へ急進化するのであれば、共産主義との接点ということが現実問題として浮上してくる。³⁵ 国際解放闘争を強調するフラームらが、ファシズムとの直接対決姿勢および反軍事主義を明確にする時、思想的には共産主義に接近することになり、組織としても彼らとの共闘の可能性はありえた。しかしことに一九二八年にコミンテルンが極左路線を明確にし、それに従ってKPDがSPDを「社会ファシズム」と攻撃するようになってから、前者の青少年組織たる共産主義青年同盟（以下、KJV）によるSAJへの組織的攻勢も激しさを増していた。それに反攻するかたちでフラームも共産主義者を批判せざるをえず、三一年四月の記事では「ハーケンクロイツ信奉者と彼らとのあいだに差異はない」として、以下のように言う。「彼ら（共産主義の青少年を指導する者たち）は、急進的あるいは対立的に振舞う青少年を、彼らの車に（馬、つまり先頭で政治運動を牽引するものとして）つなぐことができる、と思っ込んでいる。まさに『急進主義者たち』は（先頭ではなく）確固として運動の内に立っていること、その急進主義において責任をも心得ているということを、分かたてさえいれればよいものを。…〔中略〕：我々の先駆者の偉大な革命の精神についてなんらかを感じつつている、真の社会主義の急進的な労働者青少年は、嫌悪感をもってかの『同志たち』（共産主義者）に背を向けるであろう」³⁶。

一部の扇動者が付和雷同的な者たちを牽引する急進主義と、あくまで各人が自己の責任で参与し、結果として全員一丸となって現状打破を目指す自分たちの急進主義とは違う——相当程度に抽象的なこのような峻別を、フラームだけが行っていたわけではない。『青年社会主義報』のある記事は、ナチズムと共産主義の勢力拡大が青少年の急進化

の帰結であるとしながら、「ファシズムの指導者一味のえせ急進主義『Pseudoradikalismus』と「信念の急進主義 Radikalismus der Gesinnung」とを区別し、後者の重要性を説いている。³⁷しかしこのような説明がべき論を超えて現状認識としてどれほど有効であったのかは疑わしい。たとえば、三一年四月に行われた「青年社会主義者」の全国会議では、年長者と若者の対立、後者の急進化を市民層と労働者階級共通の問題としてとらえる意見も当然存在した。³⁸

フラームらリューベックSAJ指導者による、KPD・KJVとの組織的つながりを拒否する意思表示が『フォルクスボデー』紙上に載った三一年六月五日、その第一面ではライプチヒでのSPD党大会四日目の主要議題「党と青少年」³⁹について報じられた。報告者のエーリヒ・オーレンハウアーは、全体的には若い黨員や青少年に同情的であった。しかし彼は「急進主義は、それが党の実践的で政治的な活動において有効でなければ、青少年においても、それ自体としては全く価値がない」という意見であり、⁴⁰これを受けるかたちで決議ではSAJの自立性があくまで党組織の責任と信用のうえに成り立つものであることが確認された。さらに「青年社会主義者」が、国旗団との衝突を招く行為に及ぶなど、⁴¹党に批判的だったことも背景にあり解散させられた。

この党大会は党内左派に決断を迫る契機となった。すなわち寛容政策は破棄されず、またこれに先立つ三月の装甲巡洋艦建造についての国会審議において、党議員団の投票棄権の指示を破ってKPD黨員とともに反対票を投じていた九人の黨員が、非難決議の対象となった。そして独自の出版組織を展開していたザイデヴィッツとクルト・ローゼンフェルトが九月下旬に党から追放されると、彼らの周りに左派が結集し、兩名を党首として一〇月初旬に社会主義労働者党(SAP)が設立され

た。SAPは黨員数的には弱小であり、正確な数値は不明だが、せいぜい二万五〇〇〇人を有したのみである。これは当時のSPD黨員数と比較して二・五パーセント程度に過ぎず、KPDのそれと比較しても八パーセントを上回る程度である。⁴²ただしSAP陣営は相対的な若さに特徴があり、青少年組織である社会主義青少年同盟(以下、SJV)は八〇〇〇から一万の団員を有し、これはSAJの団員数と比較して一六パーセント、KJVのそれと比較すると二〇パーセントほどにあたる。⁴³

SAP分離を大差で否決したリューベックSPDの指導部は一〇月二二日、SAJ団員を集会に招集したが、そこは左派青少年たちの示威行為の場と化した。当時フラームと行動をとともにした人物は、のちに事件を次のように証言している。「ユーリウス・レーバーとの労働組合会館での大集会で我々は、ヘルベルト「フラーム」もまた、野次を飛ばした。騒乱が起こった。我々は会場守衛に殴られ叩き出されてきた。⁴⁴一方のレーバーは事件翌日の『フォルクスボデー』第一面で「リューベック労働者青少年におけるスキヤンダル！」と題して、ついに彼らへの怒りをあらわにした。レーバーはSAJの会計が赤字に陥っていたことを彼らの「数年来野蛮な文句に酔っていた無秩序の結果」と決めつけ、事件に関して「先導者として粗暴な集団の中心に大学生ペーターと生徒フラームがいた」と名指した。「こうしたこと全ては興奮しわめき散らす一味に少しも利益をもたらさなかった。若干数の国旗団団員が秩序をもたらした」としたうえで、青少年の大多数がSAJおよびSPDに忠実であると強調した。⁴⁵

事件後すぐにSAPリューベック支部が創立され、フラームもただちに入党した。この決断は、SPDおよびレーバーとの決別、原稿料および奨学金の機会の喪失を意味した。フラームはSAPでSJV指導と宣

伝業務を担当することになる。なお、SAPはリユーベックでも数的には弱小で、党員数せいぜい二〇〇人程度と推測される。SJVについては、SAJの半数以上がフレームとともにSJVに移ったというのちの証言には、ヴァインの言うように誇張を疑う必要がある。だがいづれにせよ事件前に、「いかなる党分裂もこの時期においては労働者利害の深刻な損害として影響を及ぼすに違いない」と認識し、SAJの青少年たちにしかるべき措置をとろうと考えていたリユーベックSPD指導部が被った衝撃は、数的問題のみには還元しえないだろう。事件後の翌年一月の年次報告大会では、党の分裂は顕著な影響をもたらさなかったという認識と同時に、「この重大な時期に無責任な構成員が分裂によって労働者の闘争戦線を弱めたことは、遺憾である」との見方が示された。

4 共通の敵とそれぞれの闘い

原点回帰的な党名に示されているように、SAPは真のプロレタリア政党として全労働者に革命希求の階級意識を喚起させ、彼らを対ファシズムの統一戦線に結集させることを政治理念として強調した。ゆえに「SPDの労働者たちとKPDの労働者たちのあいだの架け橋として対立を和らげる」ことを達成すべき課題として掲げてはいた。しかし、SPDは反動的性格を有する「小市民的改良政党」であり、KPDは組織として官僚主義的構造を持ち、政策的にはSPD批判に走るのみの「日和見主義的政党」であると規定していたため、この両党への批判を緩めることはなかった。したがって支持層と規模に関連させてごく簡略化して見れば、老齢な大政党SPD・若年の中政党KPD・青少年の小政党SAPという鼎立状況が生じたことも否めない。また、プロレタリア

が人民の多数派であるからその独裁は社会的民主主義であるという理論で、プロレタリア独裁が正当化されていた。ただし党内左派や青少年たちのあいだで影響力を持つようになるパウル・フレーリヒ（KPD分派出身）は、「労働者階級は民主主義や議会主義の手段では権力に至ることも、社会主義を実現することもできない」と強調した。

フレームは（記事の数は少なくなるが）SAPの機関紙『社会主義労働者新聞』を新たな執筆の場とする。早くも三年一月初旬には、労働奉仕事業を争点としつつ、SPDを批判した記事が掲載される。労働奉仕は、国家的な教育効果をも期待されつつ若者の失業対策として議論されていたが、導入に反対する者はそれを「ファシズム的脅威の一部」とし、フレームもすでに『フォルクスボデー』紙上で、それが青少年たちには「反動とファシズムの一端」ないし「代替軍事主義」にしか見えないとしていた。『社会主義労働者新聞』でも同じ文脈で「自発労働奉仕」が「労働奉仕義務への過渡的段階」だと反対し、さらに「SPD、国旗団その他が明確な態度をとらないときでも」プロレタリアの青少年はそれへの反対を宣伝するべきだとした。二項対立的な「資本と労働とのあいだの重大な分割闘争」において、ファシズムとは前者に区分されるものであり、労働奉仕はファシズム的なものであるから、それに明確に反対しないSPDの年長党員は資本との闘争を放棄したのと同然である。これがここで「青少年はまた『より小さな悪』（という言い逃れ）にもひっつかからない」とのSPDへの批判を、労働奉仕への反発と同時に展開するフレームの理論である。ファシズムを支配階級つまりブルジョアの側に分類する単純なファシズム解釈を、SAP指導部も行っていた。ゆえにファシズムとの具体的闘争方法ということについては、少なくとも当初はゼネストが想定されていた。

三二年三月の大統領選挙では、ヒンデンブルクへの投票が寛容政策を継続するSPD指導部の方針であり（ちなみにSAPはKPDのテールマンを支持した）、『フォルクスボート』でも「テールマンを選ぶ者は、ヒトラーを選ぶ！」などと訴えるキャンペーンが展開された。レーバーは共産主義の労働者にも、「三月一三日の決定はもっぱらヒンデンブルクとヒトラーの両名のあいだで下される」とKPD指導部の方針にとらわれない投票を期待した。結果は第二回投票に持ちこされたが、レーバーはKPDの不成功すなわちテールマンの敗北が「ドイツのプロレタリアートにとって、その政治的判断力にとって、そのほとんど本能的な闘争の確信にとって、栄光の一頁」だと述べた。

右翼・保守勢力への攻撃に熱を入れていたレーバーが、党の現実主義的な政策を支持し続けたことには、必ずしも一貫性は見出せない。これに関して、のち一九三三年六月に彼が妻にあてた手紙のなかには以下のようにある。彼はリュールベックでの最初の三年間「革命的」であり、「そのことが大部分の人々によって、ことによると無意識のうちに私（自身）によっても、党派の意味における『急進的』ということと同視された」。しかし国会での経験から「急遽私もまた雰囲気的に自分をこの急進主義から引き離し」たと言う。彼がここで国会のSPD議員団の雰囲気として示唆するのは急進的な変革に理解を示さない中道的な態度であり、これに関連して同年の「ドイツ社会民主主義の死因」と題する論考で彼が指摘するのは、議員団全般、とりわけ指導部の高齢化の問題である。クルト・シューマツハーなど自分と同年齢層の党員を挙げながら、彼ら「比較的若い世代」が年長の党上層部に対して影響力を行使できるかたちで統一されることはなく、「依然として一般的な消極性が社会民主主義の政治の主要な特徴であり続けた」とレーバーは言う。

SPDの国会議員としては若いレーバーも、青少年フラームから見ればやはりSPDの消極性（寛容政策や共和国への固執）と結び付けられる年長者に過ぎなかったのは皮肉であるが、その彼も自分の世代が抱える問題を意識していた。アビトゥーア取得のための論文において、フラームは自分たち青少年が陰鬱な状況におかれていることを綴っている。三者択一のテーマから彼が選んだのは、あるギムナジウム生が卒業生代表として行ったスピーチ——学校が彼らに教えたことは何ら役に立たず、「我々は希望なき青少年である」とする発言——であった。不況下で手に職つけるには教養エリート層の青少年たちが受ける教育は明らかに機能不全に陥っていたが、労働者階級出身のフラームも、同世代の者として彼らを「仲間たち」ないし「友」と呼びつつこの発言に正当性を認める。すなわち、自分も取得するアビトゥーアを「何の資格も与えない資格証明書」だと皮肉り、「今日我々は、少数の者たちを除き、物事全てを悲観的に見る」、青少年たちは「虚無の前に立っている。彼らの幻想は破壊され、彼らの希望は消え失せる。彼らは告発する！」と記したのである。

フラームは三二年二月のアビトゥーア取得後もリュールベックにとどまった。大学に行くことができなかった彼は、海運業を営む会社で見習いとして関税手続き時の書類業務などに従事し、仕事を終えた後や休日には政治・宣伝活動を行った。だがこの年七月と十一月の国会選挙では、SAPの得票数はそれぞれ七万二六三〇票と四万五二〇〇票に過ぎず、一議席も獲得できなかった。支持層の若さゆえにその勢力状況が票数には反映されなかった（選挙権は二〇歳以上）という推測もできなくはないが、いずれにせよSAPに議会内闘争の可能性は全くなかった。

SAP自体そうであったように、フラームも全労働者の団結という理

想を訴えながら同時にSPDおよびKPDへの批判を展開した。それは両立不可能ではないが、失望に陥る可能性もはらんでいた。「社会主義者鎮圧法の（もとでの）小さくも勇敢な闘争共同体から巨大な、猛烈な大衆への道。しかしながら（それは）、闘争喪失、階級敵対者のよき心への期待という害がなかに紛れ込んだ大衆への道」、であった——このSPDの歩みで生じた害を取り除き、しかし同時に小集団ではなく全労働者がともに行進すること、これがフラームの望んだことである。しかしこの年のメーデーで彼が見たのは政党別に行進する労働者たちであった。「プロイセンのある町で党同志は」全力で労働者の統一的デモのために尽力していた。KPDは地域指導によって、別々に行進せよと命令されていた。そしてそこは、労働者がナチスの最悪のテロルにさらされている町である。ここで厳格に言わねばならない。全ての党官僚機構は、統一されたメーデー行進を妨げていて、プロレタリアートの名を汚したのである。：「中略」：メーデー式典委員会が『万国のプロレタリアよ、団結せよ』の代わりに、当面むしる『ドイツのプロレタリアよ、団結せよ』とメーデー式典の記章に綴ればよかつたのだが！——国際解放闘争を訴えていたはずのフラームもそのように嘆かざるをえなかつた。

第二回投票で大統領にはヒンデンブルクが当選し、首相には六月に中央党のパーペンが就任、国政は保守派がヒトラーをいかに「飼いならす」かということに重心が移りつつあった。パーペンはプロイセン政府を罷免し、SPD指導部は最高裁に訴えるという合法的抵抗に応じたが、結局は最重要拠点「赤いプロイセン」を失う。『フォルクスボデー』の第一面にも、レーバーの署名はないが、党のとつた合法的手段を容認する記事が掲載される。しかし出撃を期していた鉄戦線（国旗団に他組

織を加え三二年末に結成された）による実力的抵抗が指導部の後盾もなく不発となったため、「歯ぎしりしながら我々の飢えた仲間たちは、内心沸点に至るまで激昂して、労働運動の最上の掟に従つた、それは、規律ということである」と屈折した感情をにじませる内容であった。共和国防衛のための準軍事的な組織へのこだわりは継続していた。一月の国会選挙投票日前日、鉄戦線の行進行事にあわせて催されたリューブツクでの政治集会で、レーバーは「ドイツを政治的不自由から守つたことは、鉄戦線の大きな業績である」とその存在価値を強調し、「今やそれは戦前の紳士層（ほとんどが貴族出身者という時代錯誤的構成だったパーペン内閣のこと）に対する新たな闘いを行わなければならない」と呼びかけた。⁶⁷

一九三三年一月三〇日、ヒトラーが首相に就任し、ただちに国会選挙が行われ左派諸政党への露骨な妨害が続いた。レーバーは二月一日未明に突撃隊の襲撃を受け、同行していた国旗団団員が襲撃者の一人に致命傷を与えてしまったため、負傷したレーバーも共に逮捕された。二週間後に釈放された彼を——決別したとは言えフラームも労働組合の責任者に釈放のためにストライキを持ちかけたという——リューブツクの労働者たちは熱烈に迎えた。レーバーはその三日後の集会で、負傷のため演説は不可能だったが、一万五〇〇〇人の参加者たちを前に「自由を！」と挨拶した。彼は友人たちに国外亡命を勧められたが拒否した。数カ月後の妻への手紙のなかではその理由として、嘲笑をうけることや責任逃れとなることへの危惧、家族やリューブツクの人々への配慮といったことが綴られているが、いづれにせよ共和国という祖国を捨てて逃亡することを彼は想定していなかつた。

ファシズム独裁が現実となる最後の段階で、左派諸政党の指導部間に

協調の可能性が見えかけたが、実を結ぶには至らなかった。すなわち二月二七日、KPD党議長テールマンはSPDに「反ファシズム闘争同盟」の結成を呼びかけていたが、同日夜の国会放火事件を機にKPDは非合法に追いやられた。一方SAPは、指導部が三月三日に党解散を決定し、黨員にSPDないしKPD残部に移り社会主義勢力を結集させることを促した。しかし党内左派や青少年層を中心にそれに応じない者は多く、彼らの代表約六〇人が同月一日から二日にドレスデン近郊で非合法党大会を敢行する^①。そのなかにフラームの姿もあった。警察やナチ黨員の目を避けながらやって来た彼は、メクレンブルク地域の現状を報告した。それによれば、リューベックは七五人の黨員を維持していたが、他都市の同志たちとの連絡は困難となっていた。しかし「統一戦線政策において我々は貢献した」として、活動を停止したKPDに代わり「我々は援助に向かい共産主義者の指導を引き継がねばならない。今や我々の小さなグループが労働者のあいだで影響力を有していることが示される」と述べた^②。

統一戦線の望みを捨てていなかったフラームだが、まだ公式には禁止されていなかったSPDとの連携という手段に、その望みを見出そうとはしなかった。リューベックでフラームらは人目を忍んでビラの作成や配布を続けたが、その内容はヒトラーの政権掌握を許したとしてSPDを攻撃するものであった。「若年労働者への手紙」と題されたビラでは、SPDにより支持された改良主義は「プロレタリア問題における墓堀人」であり、「ファシズムのために地ならしをした」とされる。「労働者たちは『民主主義』と『共和国』の概念を神聖なものとして吹き込まれた。しかし市民的な民主主義の白日のもとで資本家たちとその信奉者の力は増大した。社会民主主義は労働者階級の仇敵と腕を組んで行進し

た」——ファシズム独裁に対し「プロレタリア独裁」のための闘争を主張する彼らは、しかしながら前者について「我々はその支配がかなりの期間にわたることを覚悟しなければならない」と予見していた^③。

ナチズムという共通の敵に対して、一人の社会主義者はそれぞれに闘うことに徹した。レーバーは三月二三日に国会へと向かう途中で再び逮捕された。この日の審議には全権委任法の可決がかかっており、残っていたSPD議員は全員が反対票を投じたが、かいたく同法は成立した。SAPは国外から反ナチズム活動を行うために、ノルウェー労働党に支援を期待しており、フレリヒがオスロに向かう予定であった。しかし彼も逮捕されたため、もともとその支援を任されていたフラームが代わりに赴くことになった。同志の仲介で漁師の援助を得て、フラームはドイツに程近いデンマークのレズビュハウンまで渡ることとなった。偽名として「ヴィリー・ブランド」を名乗った彼は、四月初め漁船に身を潜め夜の海を北へと向かったとき、まだ二〇歳に満たなかった。

5 おわりに——社会主義者の「世代の問題」——

「世代間、つまりは過去と現在との間の連関が切れていること」が二〇世紀という時代に生じた一つの質的転換点とするなら——ホブズボームのこの指摘は個人主義による社会関係の解体という文脈においてなされており、その是非はおくとしても——ヴァイマル共和国末期はその典型^④と云いうるのだろう。希望の兆候が見えないこの時期に、人々が「急進的な『希望の担い手』共産党とナチ党に向かった」こと^⑤、そしてとりわけ若い世代が強くその傾向を有したことは、「過去と現在」との不連続性を印象づけるものである。

SPD陣営内では指導層高齢化などの問題があり、政策的不徹底さに不満を覚え急進化する青少年たちが存在した。そのなかの一人がフラームであった。フラームは一方で自分たちの急進主義と他の政治勢力のそれとを峻別していたが、他方で青少年の一人としては経済破局を基調とした時代の陰鬱さを共有していた。ここに、彼らの動向を単にSPD特有の問題とせず、ヴァイマル末期の全般的な急進主義とも関連付けて論じうる可能性があるが、さらに綿密な検討は他日を期したい。

レーバーについては詳述できなかったが、若くして前線を経験した者として、共和国を重視しその軍事的な防衛という志向を見せた社会民主主義者は、彼だけではなかった。⁽⁷⁾したがって、そのような志向を理解しえないフラームとレーバーとの決別は、社会主義勢力内の世代間の齟齬という文脈でとらえられる。この齟齬が当時の社会状況一般における世代間対立という問題といかなる関係にあるのか、一層の検討が必要である。

これらの検討の延長線上で、六八年世代の若者を引きつけた「世代間の和解者」としても評価される⁽⁸⁾のちの政治家ブランドを理解するにあたって重要な思想的背景を紡ぎだせるのかもしれない。

注

- (1) Willy Brandt, *Mein Weg nach Berlin*, aufgezeichnet von Leo Lania, München 1960, S. 41.
- (2) Gregor Schöllgen, *Willy Brandt. Die Biographie*, Berlin 2001; Peter Menseburger, *Willy Brandt 1913-1992. Visionär und Realist*, Stuttgart/München 2002.
- (3) Martin Wein, *Willy Brandt. Das Werden eines Staatsmannes*, Berlin 2003.
- (4) デートレフ・ポイカート、小野清美・田村栄子・原田一美訳『ワイマ

ル共和国——古典的近代の危機』名古屋大学出版会、一九九三年（原著一九八七年）、一八一—二二頁および七七—八四頁。以下の論文の訳者解題は、当時の世代問題についての諸見解をごく簡潔にまとめている。ウルリヒ・ヘルベルト、芝健介訳「即物主義の世代——ドイツ一九二〇年代初期の民族至上主義学生運動（上）」『みすず』第四九三号、二〇〇二年（原著一九九一年）。

- (5) ハンス・モムゼン、住沢とし子訳「ワイマール共和国における世代間抗争と青年の反乱」『思想』第七一一号、一九八三年（原著一九八三年）'、一〇四—一六頁。
- (6) Willy Brandt, *Erinnerungen*, 3. Aufl., Frankfurt am Main/Zürich 1989, S. 88.
- (7) *Libecker Volksbote* (以下、LVと略記)、22. Februar 1927.
- (8) LV, 12. Dezember 1928. フラントの史料集成『*Willy Brandt Berliner Ausgabe*』の第一巻 (*Hitler ist nicht Deutschland. Jugend in Libeck — Exil in Norwegen 1928-1940*, bearbeitet von Einhart Lorenz, Bonn 2002) にこの記事は所収されている (S. 80)。以下、同書に所収されている史料は、WBの略記とよみかたその頁数を示す。

- (9) Brandt, *Erinnerungen*, S. 93.
- (10) LV, 28. Juni 1922.
- (11) LV, 23. August 1923.
- (12) LV, 27. August 1929 (WB, S. 81-2).
- (13) LV, 11. März 1930 (WB, S. 83-4).
- (14) LV, 17. Dezember 1929.
- (15) Brandt, *Erinnerungen*, S. 89.
- (16) *Jungsozialistische Blätter*, Jg. 8 (1929), Heft 12, S. 354-6.
- (17) *Jungsozialistische Blätter*, Jg. 8 (1929), Heft 12, S. 359-60.

- (18) LV. 3. Dezember 1929.
- (19) LV. 25. März 1930.
- (20) *Jungsozialistische Blätter*, Jg. 8 (1929), Heft 12, S. 359-60.
- (21) LV. 6. Mai 1930 (WB, S. 85-8).
- (22) *Das freie Wort*, Jg. 2 (1930), Heft 29, S. 13-4.
- (23) Brandt, *Mein Weg nach Berlin*, S. 45-6.
- (24) LV. 20. November 1930.
- (25) LV. 24. September 1930 (WB, S. 88-91).
- (26) *Der Klassenkampf*, Jg. 4 (1930), Heft 17, S. 541-2.
- (27) LV. 24. September 1930 (WB, S. 88-91).
- (28) Dorothea Beck, *Julius Leber. Sozialdemokrat zwischen Reform und Widerstand*, Berlin 1983, S. 35.
- (29) Julius Leber, „Die Todesursachen der deutschen Sozialdemokratie“, in: Dorothea Beck / Wilfried F. Schoeller (Hrsg.), *Julius Leber. Schriften, Reden, Briefe*, München 1976, S. 235.
- (30) LV. 1. Juni 1929.
- (31) LV. 17. November 1928.
- (32) LV. 5. Januar 1931.
- (33) *Der Klassenkampf*, Jg. 4 (1930), Heft 23, S. 705-8.
- (34) LV. 16. März 1931.
- (35) フロートと共産主義の接点と「ソビエト」以下が比較的詳しい。Hans Georg Lehmann, *In Acht und Bann. Politische Emigration, NS-Ausbürgerung und Wiedergutmachung am Beispiel Willy Brandts*, München 1976, S. 81-90.
- (36) LV. 28. April 1931 (WB, S. 92-4). □内の補足は本文中略す引用者による(以下同様)。
- (37) *Jungsozialistische Blätter*, Jg. 10 (1931), Heft 1, S. 25-6.
- (38) *Jungsozialistische Blätter*, Jg. 10 (1931), Heft 5, S. 133.
- (39) LV. 5. Juni 1931.
- (40) *Sozialdemokratischer Parteitag in Leipzig 1931 vom 31. Mai bis 5. Juni im Volkshaus. Protokoll*, Berlin 1931, S. 229.
- (41) *Der Klassenkampf*, Jg. 4 (1930), Heft 23, S. 734-5.
- (42) Hanno Drechsler, *Die Sozialistische Arbeiterpartei Deutschlands (SAPD). Ein Beitrag zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung am Ende der Weimarer Republik*, Meisenheim am Glan 1965, S. 160.
- (43) Ebd., S. 164. ソーヴの団員数についても詳細は把握しがたし。ドイツ出国後のプリントが参加した社会主義の青少年組織の各国代表会議では以下の数値があげられている。すなわち「SAPD 結党時には七〇〇〇〇から一万人の青少年がSJVを結成し、当時(一九三四年二月)は四〇〇〇〇から五〇〇〇〇人の団員を有していた」。Internationale Konferenz der unabhängigen revolutionären Jugendorganisationen, am 24., 27., und 28. Februar in Laren und Lille, in: Archiv der sozialen Demokratie (AdSD), Willy-Brandt-Archiv (WBA), Politisches Exil und Nachkriegszeit(A5), ungeordneter Bestand.
- (44) *Stern*, 13. Dezember 1973, S. 49.
- (45) LV. 23. Oktober 1931.
- (46) Werner Petrowsky, *Libeck, eine andere Geschichte. Einblicke in Widerstand und Verfolgung in Libeck 1933 - 1945*, Lübeck 1986, S. 15, 17, 51.
- (47) Wein, a. a. O., S. 74.
- (48) LV. 10. Oktober 1931.
- (49) LV. 27. Januar 1932.

- (50) Parteivorstand der Sozialistischen Arbeiterpartei-Partei Deutschlands (Hsg.), *Was will die Sozialistische Arbeiter-Partei Deutschlands? Material über das Aktionsprogramm und die Organisationsgrundsätze der SAPD*, Berlin o. J. (1931), S. 4.
- (51) Ebd., S. 9-10.
- (52) Ebd., S. 13.
- (53) Paul Frölich, „Vorwort“, in: Bezirksverband Berlin-Brandenburg der Sozialistischen Arbeiter-Partei Deutschlands (Hrg.), *Was will die SAP? Prinzipien-Erklärung, Aktionsprogramm, aufgenommen auf dem 1. Parteitag 1932 der Sozialistischen Arbeiter-Partei Deutschlands*, Berlin o. J. (1932), S. 18.
- (54) *Jungsozialistische Blätter*, Jg. 10 (1931), Heft 1, S. 11-5.
- (55) *JV*, 5. Juni 1931.
- (56) *Sozialistische Arbeiter-Zeitung*, 7. November 1931 (WB, S. 100-2).
- (57) Parteivorstand der Sozialistischen Arbeiterpartei-Partei Deutschlands (Hsg.), a. a. O., S. 12.
- (58) Drechsler, a. a. O., S. 183-7.
- (59) *JV*, 9. März 1932.
- (60) *JV*, 14. März 1932.
- (61) Lübeck, 23. Juni 1933(I), Untersuchungsgefängnis Marstal, in: Beck, a. a. O., S. 233.
- (62) Leber, „Die Todesursachen der deutschen Sozialdemokratie“, S. 233-4.
- (63) Brandts Abituraufsatz, Winter 1931/32, in: WB, S. 102-9.
- (64) Drechsler, a. a. O., S. 272-3, 281-2.
- (65) *Sozialistische Arbeiter-Zeitung*, 3. Mai 1932 (WB, S. 112-4).
- (66) *JV*, 25. Juli 1932.
- (67) *JV*, 5. November 1932.
- (68) Brandt, *Erinnerungen*, S. 95-6.
- (69) Lübeck, 5. September 1933, Untersuchungsgefängnis Marstal, in: Beck, a. a. O., S. 282-3.
- (70) 一月末までで党員は約一万七五〇〇人に減っていたが、党大会時は一万五六〇〇人を数えたとされる。他の左派政党に移った者はわずかだったとごまかすことになる。Drechsler, a. a. O., S. 328. また、オスロに置かれることになるSVの在外事務局——その指導にあたっていたのはブランドトである——が編集した以下の冊子では、この党大会との関連において、サイデウイツツラの周囲の中道派が党を去り「SADのSVはごまや事実上一つのまとまりである。青少年が党の担い手になつた」と評されている。Zentrale Auslandsstelle des Sozialistischen Jugendverbandes Deutschlands (Hsg.), *Die internationale Situation der Proletarierjugend nach der deutschen Niederlage*, Oslo 1934, S. 30.
- (71) Bericht Brandts auf dem illegalen Parteitag der SAP in Dresden, 11. oder 12. März 1933, in: WB, S. 114-5.
- (72) Brief an einen Jungarbeiter!, in: AdSD, WBA, A5, ungeordneter Bestand.メルゼブルガーはこのビュフの前半部分(「ドイツにおけるファシズムの勝利」ドイツからの手紙)と見出しが付されており、本稿執筆者は同一のビラを所蔵先で確認し、引用は全てこの部分から行った)をフレームにより起草されたものとして扱っている。Mersseburger, a. a. O., S. 51-2.
- (73) 非合法党大会の頃に偽名を使いはじめたという説もあるが、この出国直前の時期から使用したとごまかす予測は以下による。Wein, a. a. O., S. 85-6, 89.

- (74) エリック・ホブズボーム、河合秀和訳『20世紀の歴史——極端な時代（上巻）』三省堂、一九九六年（原著一九九四年）、二六頁。
- (75) ポイカート、前掲書、二二七頁。
- (76) 以下が「シューマッハー世代」として分析している。Meik Woyke, „Die „Generation Schumacher““, in : Klaus Schönhoven / Bernd Braum (Hrsg.), *Generationen in der Arbeiterbewegung*, München 2005.
- (77) この評価については、以下を参照。中谷毅、「W・ブランド——その人物と業績に関する若干の考察——ブランド死後の評価を巡って——」『法学雑誌』（大阪市立大学）第三九卷第三・四号、一九九三年、一〇〇—一五頁。

（おかうち かずき・京都大学大学院）